

野戦郵便で送られたこの郵送記事は、ほぼ一ヶ月の長旅を経て、八月四日の『九州日報』に掲載された。

3 鷗外と「情報」

鷗外造語説

森鷗外（林太郎）は、小説や、クラウゼヴィッツ（Clausewitz）の『戦争論（Über den Kriege）』を訳した文中で、「情報」という語を用いている。このため、戦後になって情報社会が到来したさいに、鷗外が最初に「情報」を使ったのではないかという期待や、願望を裏付ける役割りを担い、一躍脚光を浴びることになった。このため、私が「情報」という語の用例を調べ始めるまで、その語源については森鷗外が造語したとする説が一般的で、いまでもそう信じこんでいる人がたくさんいる。

日本銀行の理事などを務め、森鷗外の研究家としても知られた吉野俊彦は、『週刊東洋経済』の一九八四（昭和五九）年一月二一日号に、

近頃、情報ばやりであろうか、この「情報」という語は日本で誰が使い始めたのか、特に鷗外

が使っていたかどうか調べてくれという依頼が、ここ三年間に数件あった。

と記している。また、それより少しさかのほって、一九七九（昭和五四）年刊行のNHK大学講座『情報と認識』を見ると、九州大学の北川敏男（統計学、情報科学）が、

情と報とを結びつけた情報という語は、日本語の世界では、そう古いものではなく、森鷗外あたりの造語とも聞いたことがある。

と書いており、すでに一九七〇年代後半には、「情報」という語の鷗外造語説が流布していたように見受けられる。一九七四（昭和四九）年に小学館が刊行した『日本国語大辞典』第十卷の「情報」の項に、鷗外が『藤鞞絵』で「情報」という語を用いた文章が引用されているので、これが噂の引き金の一因になったのではないかと推測する。

日本医薬情報センター理事だった長山泰介は、「情報」という語の起源を極めて大雑把に調べた上で、『ドクメンテーション研究』の一九八三（昭和五八）年九月号に、鷗外が一八八七（明治二〇）年前後にクラウゼヴィッツの『戦争論』を翻訳した際に造語したのが最初ではないかという、鷗外造語説を公にした。しかし、このことを裏付ける資料は未だに何も見出されておらず、また論文で長山自身が認めているように、単なる予想に過ぎない。前節でその一例を示したよう

に、その後、この説に対する異論がいくつか出た。ただし、それらの多くは『戦争論』の訳本の出版時にすでに「情報」が流通していたことを指摘するもので、一八八七（明治二〇）年頃までさかのぼって検証しているわけではない。

鷗外翻訳のいきさつ

森鷗外は、ドイツに留学していた時に、ベルリン陸軍大学校に留学していた早川（後に姓を田村に戻している）怡与造いよぞうにクラウゼヴィッツの『戦争論』の講釈をし、その時に巻一の過半を訳した。この時のようすは、鷗外の『独逸日記』ドイツに次のように記されている。

（一八八八（明治二二）年一月）十八日。夜早川来る。余為めにクラウゼキッツの兵書を講ず。クラウゼキッツは兵事哲学者とも謂いふ可べき人なり。其書文旨深邃ぶんししんすい、独逸留学の日本将校等能く之を解すること寡すくなし。是より早川の為めに講筵こうえんを開くこと毎週二回。

鷗外は、その十年ほど後に第十二師団の軍医部長として小倉に転勤になったが、ベルリンでのいきさつを知っていた師団長の井上光中ひかる中将や、参謀長だった山根武亮たけすけ大佐の勧めで、一八九九（明治三二）年一二月から将校のクラブである偕行社でこの本の講釈を始め、訳本の準備に取りかかった。巻二までの訳出分は、北清事変直後の一九〇一（同三四）年六月に『戦論』という題名

で第十二師団司令部から石版印刷され、関係方面に配布された。

一方、陸軍士官学校では、フランスの訳本から重訳作業を進め、同年九月以降に『大戦学理』と名付けて、巻三、四、五、六上を出版した。このことを知った鷗外は、巻三の途中で『戦争論』の翻訳を断念した。陸軍士官学校が、クラウゼヴィッツの軍事哲学の精髓を飛ばして途中の巻から訳出したのは、鷗外の翻訳作業とは無関係だったようで、日本近現代史学者の大江志乃夫によれば、陸軍では『戦争論』の各論にすぎない巻三以下にしか興味がなかったからだという。〔日本の参謀本部〕一九八五年、中央公論社〕。

鷗外が訳した巻一、二と、陸軍士官学校が重訳した巻三以降の双方は、合わせた形で一九〇三(同三六)年一月に、軍事教育会から改めて『大戦学理』という題で刊行された。また、『門司新報』は、一九〇四年二月から『戦論』と題して、鷗外の訳文を連日掲載した。

鷗外と「状報」

『大戦学理』巻一の六章「戦の情報」(Nachrichten im Kriege)の冒頭に、

情報とは、敵と敵国とに関する我智識の全体を謂ふ。

(Mit dem Worte Nachrichten bezeichnen wir die ganze Kenntnis, welche man von dem Feinde und seinem Lande hat, also die Grundlage aller eigenen Ideen und Handlungen.)

という定義の訳がある。添えた原文からわかるように、「情報」の原語は Nachrichten であるが、大島進が指摘したように、その前の三章「軍事上の天才」で、次に示すように一箇所だけ Nachrichten が「情報」でなく、「状報」と訳されている。

戦は偶然の境界なり。人の事業中常に偶然と相触る、者戦に如くは無し。故に偶然の為に多く余地を存せざる可からざることも亦戦に如くは無し。偶然は諸状況をして其不確実の度を加へしめ、又事業の進捗を阻碍する者なり。

彼の諸状報及び諸予想の不確実と此の偶然の頻りに来ることは、戦者をして常に其遇ふ所の其の期する所に異なるを感ぜしむ。

大島進によれば、『戦論』が『大戦学理』に含まれた時に一部の語句に改訂が施されていて、『状報』が「情報」に改められた部分が他にもあるという（一九〇〇年、情報処理学会第四〇回全国大会）。

このように、確かに鷗外は『戦論』ないしは『大戦学理』で「情報」および「状報」という語を訳語として用いており、もし造語したとすれば、早くて一八八七（明治二〇）年ということになる。しかし、すでに「情報」という語を用いた訳書が一八七六（同九）年と一八七八（同一）年に出版され、また、一八八二（同一五）年には『野外演習軌典』に「情報」が採用されて

いる。鷗外が医学校の本科を十九歳で卒業したのが一八八一年であり、鷗外造語説は成立しない。鷗外が早川に講釈した一八八七（同二〇）年頃には、すでに陸軍内で「情報」という語が定着しており、むしろ、早川を通して鷗外が「情報」という語を知った可能性の方が高い。

鷗外と造語

国文学者である小島憲之は、『ことばの重み——鷗外の謎を解く漢語』（一九八四年、新潮社）の中で次のように書いている。

一般の社会人、民間人たちを「地方人」と呼ぶのが常だった軍隊用語の威圧とおごりの構造のなかに、到底ついて行かれぬ思いだった。わたしは、入隊後間もないころ、顔を洗うべき「洗面所」ならぬ「面洗所」の物かげにひそんで、こうした軍隊用語の造語者の有力な一人であったかという軍医森鷗外をどんなに恨んだことか。

これを読むと、あたかも鷗外が多くの用語を造語していたように受け取れる。

しかし、『鷗外全集』の第十七卷（一九二四年、岩波書店）にある編纂者（入沢達吉、壯司秋次郎）の辞には、

さて少し落ついて字をひろつて行くと、たちま忽ち奇怪な用字にぶつつかる。これは何かの間違であらうと思つて、貧弱な古字引に当つて見ると、あに豈計らんや如何にも歴とした故事のある、し而かも字画の正しい熟語である。

とあり、鷗外が漢籍から多くの熟語を引用していることを示唆している。

鷗外が造語しているかどうかについて、吉野俊彦に直接尋ねたところ、一八九六（明治二九）年に鷗外が雑誌『めざまし草 まきの三』に掲載した、『西楽と幸田氏と』という随筆を教示された。これは鷗外が西楽、すなわち西洋音楽について論じたものであるが、その文中で用いた用語について、

用語の或はおだやか妥ならざるは、我国なほ西楽に関する学問上の記述少く、われをしてしばしば屢已むことを得ずして造語せしめしによる。読者幸いに正せ。

と記し、結びとしている。すなわち、西洋音楽については、これまでわが国では学問的に記述したものが少なく、ここではやむを得ず造語したものがあると、わざわざ断っているのである。このことは、逆に鷗外は、他ではほとんど造語してこなかったことを意味するものであろう。

『戦論』の貢献度

鷗外造語説が否定されると、今度は、鷗外が「情報」という語を普及させたという記述が目につくようになった。しかし、鷗外が「情報」という語の普及にどれだけ寄与したかといえば、大方の期待に反してその貢献度はほとんどなかったとみなしてよい。

鷗外が「情報」を最初に用いた書物は『戦論』および『大戦学理』であるが、これらが出版された時にはすでに「情報」という語が新聞や辞書に現れていて、かなり一般化していたことはこの章と次章の記述からも明らかである。

そもそも、『大戦学理』は陸軍が出版した兵書であり、一般の人が手にするような本ではない。また、クラウゼヴィッツの原本そのものは量が多い上に、非常に難解である。先に引用した『独逸日記』に記されているように、早川が鷗外にクラウゼヴィッツの『戦争論』を講釈するよう依頼したのは、この難解さによる。早川のような有能な陸軍軍人の語学力をしても、その内容を理解しかねたのである。

防衛大学の川村康之（国防論）は、『図解雑学 クラウゼヴィッツの戦争論』（二〇〇四年、ナツメ社）の中で次のように解説している。

『戦争論』は『孫子』とともに世界的に有名な軍事古典だが、多くの人が読みこなせなくてサジを投げた難解な書物として有名である。その一つの理由として、当時のドイツで一世を風靡

していたヘーゲルの弁証法を適用している点があげられる。つまり、抽象（観念的な絶対的戦争）と現実（現実の戦争）を対比させながら戦争の本質へ近づいていく論理構成ゆえに、文章描写は結果として非常に難しくなった。

おそらく軍人でも、『大戦学理』を読んで理解した人は少なかったはずである。また、クラウゼヴィッツの理論は、防禦よりも攻撃を優先する陸軍の軍事方針とは相容れないものだったために、ほとんど注目されず、日本の戦前の軍事書で引用されることは少なかった。例えば、一九一一年（明治四四）年に兵事雑誌社から出版された『戦略戦術詳解』は日本陸軍が残した最大の戦略戦術参考書であるが、『大戦学理』については全く触れられていない（前原透『日本陸軍用兵思想史』一九九四年、天狼書店）。

『軍務局長武藤章回想録』（じゅうほうしやお上法快男編、一九八一年、芙蓉書房）によれば、武藤は一九二九（昭和四）年に陸軍大学の専攻学生となつて「クラウゼヴィッツと孫子との比較研究」を行い、その成果は、後に『偕行社記事』（一九三三年、七〇五号巻末附録）に紹介された。その後、日本兵学界にクラウゼヴィッツと孫子が再熱的に論議的となったと回想しているが、日中戦争の当初に作戦課長だった武藤がクラウゼヴィッツの理論をどれだけ活かしたのか、はなはだ疑わしい。

馬込の『戦争論』

日本でクラウゼヴィッツの『戦争論』に関心を寄せたのは、むしろ軍人ではなく、左翼の思想家たちだった。一九三一—二（昭和六—七）年に南北書院から訳書『戦争論』を出版した馬込健之助（淡徳三郎）は、訳者序言の中で次のよう述べている。

クラウゼヴィッツが吾々にとつて興味があるのは、それが軍事専門家によつて重んじられてゐる為ばかりではない。彼は又、マルクス、エンゲルス、レーニンを始め、多くの共產主義者達の細大の関心の対象ともなつてゐたのである。

クラウゼヴィッツの所論を最も徹底的に取り入れる事の出来たのはレーニンであった。彼は戦争と政治との連関に就いてのクラウゼヴィッツの理論を、交戦国内部の階級闘争に対して迄も延長した。

また、馬込は鷗外の訳文について、

稍古体に属し、現代の多数の読者には、宛も漢文を解説するが如き感あるを免れない。

と指摘し、新たに訳出を試みた理由の一つに挙げている。馬込の訳書は、ほどなく一九三三年に

岩波文庫に収録された。

このように、兵書で、かつ内容も記述も、ともに難解な『大戦学理』を一般人が読んだとは到底考えにくく、『大戦学理』は「情報」ということばの普及にほとんど寄与しなかったとみてよい。『大戦学理』の中で、鷗外が訳出した部分が岩波書店の『鷗外全集』第三四巻に収録され、出版されたのは一九七四（昭和四九）年で、一般の人が普通に閲覧できるようになったのはこの後になる。

「情報」を用いた作品

他に、「情報」という語を用いた鷗外の作品として、年代順に、『朝寐』（一九〇六年）、『脚本「ブルムウラ」の由来』（一九〇九年）、『藤鞞絵』（一九一一年）、『大塩平八郎』（一九一四年）および『洪江抽斎』（一九一六年）を挙げることができる。

この中の『藤鞞絵』では、「情報」がキーワードになっている。佐藤という主人公が待合で酒を飲んでいた時に、遅れてやってきた若い芸者が前にきて、「あら、しばらく」と声をかける。全然見覚えのない人なのでびっくりするが、この時のようすを、

かう云ふ不慮な出来事は、丁度軍隊の指揮官が部下の大勢ゐる前で、予期してゐない情報を得た時のやうなものである。

と描写している。

どこで会ったのか、とんと思い出せないで、交わす会話の中から一生懸命に手がかりをさぐり出そうとする。「あなたあれきり手紙も下さらなかったのね。随分だわ」の「あれ」という語に「第二の情報」が含まれており、「わたし、あの時お話したようになっちゃうから」の「あの時」から「第三の情報」を得るといっわけである。周りから「お安くないね」とからかわれるが、それでもまだ思い出せない。実は芸者が、着物の紋が同じ藤柄絵だった佐藤を身代わりにして、遠く離れている人にいいたいことをいったという話である。

他の作品を見ると、『朝寐』では「情報課の参謀」、脚本「ブルムウラ」の由来』では「信度国王ダアヒルは、長男ゲシユヤの情報を得て軍議を凝こしたが」、『大塩平八郎』では「土井の二度の巡見の外、中川、犬塚の両目附は城内所々を廻つて警戒し、又両町奉行所に向いて情報を取った」、『浜江抽斎』では「戦争は既に所々に起つて、飛脚が日ごとに情報を齎もたした」という表現が使われているが、いずれも「情報」は一作品に一度現れるだけである。

これらの用例を見ると、鷗外は「情報」を軍事用語としてかなり意識して使っていたことがわかる。右に示した作品はすべて北清事変からかなり年数が経ってから書かれたものであり、また、「情報」の出現回数も少ないことから、「情報」ということばの普及に対する鷗外の貢献度はかなり低いとみなざるを得ない。

作家等の用例

当時の作家達を書いた文書で、「情報」の用例を探してみることにしよう。

一九〇一（明治三四）年発行の雑誌『太陽』第三号を見ると、東洋史学者になった内藤湖南が『清朝興衰の関鍵』の中で情報の伝達速度にふれ、「情報の快速と補充の整備を以て勝を全局に決し」とか、「浙江は三千三百清里にして、四日にて達する情報は豈に電報なき時代に於て、最神速の者とせざるらんや」と記述している。

小説で初めて「情報」を使ったのは鷗外だ、と書いた本もあるが、一九〇六（同三九）年一月発行の雑誌『心の花』に掲載された『朝寐』以前に出版された軍事小説で、すでに「情報」が使われている。例えば、戦争小説家として人気を博した江見水蔭が一九〇四（同三七）年に書いた『軍事小説 武装の巻』（博文館）には、

五千の露兵、韓境を犯し、続々前進して来らんとの情報は、櫛の歯を引くが如くに来つて、城津居留民の耳に伝はるのである。

という表現がある。また、博文館から従軍記者として派遣された田山花袋の『第二軍従征日記』（一九〇五年、博文館）に、次に示すように「状報」の用例がある。

近くまで行つた憲兵や、司令部から遣つて来た伝騎などの状報から段々先方の状況を綜合して見ると、何うも戦鬪が明日も続き相である。

一九〇四（同三七）年に「勤王の母」と呼ばれた松尾多勢子の伝記が公論社から出版されている（清水謹一『勤王女傑贈正五位 松尾多勢子』）。信濃の伊那地方の山間に住んでいた多勢子は、尊皇の論が盛んになり、予て交流のあつた諸藩の志士から頻繁に上京を促されたことから、一八六二（文久二）年に夫敦斉の許可をもらつて京都へ赴く。この時多勢子は五十二歳であつた。このようすを描写したのが第七章であるが、そのタイトルは「刀自情報に接して上京す」で、「情報」が使われている。

他に作家では、二葉亭四迷も「情報」を用いており、日記には「監督公使館及山根將軍を訪問すとして出て行く、これに托して昨夜の情報を山根將軍ニ致す」という表現を、また遺稿に「亜細亞ニ於テ政治上尤モ重要ノ地方少カラス、而シテ此等ノ地方ヨリ情報ヲ我ニ齎シ来ル者ハ、偶々派遣セラレタル將校ト學術遠征隊トニ過キスシテ」という用例を見出すことができる。